

今から「未来の僕」にできること

高松市立川東小学校 6年 葛籠 光 さん

「もう朝か。」

今朝も母が体をゆすって起こしてくれた。朝が苦手な僕は、目覚まし時計を二つセットしているが、時々聞こえないことがある。生後すぐの検査で難聴と診断されたからだ。小学校二年生で支援学級に入級するまで、聞き取りづらくて困ったことがよくあった。そんな僕をいつも側で支えてくれたのは、家族だ。また、先生や友だちも僕の特性を理解し、苦手なことをそばでサポートしてくれた。

僕の母はとても喜怒哀楽があり、僕や妹にとびっきりの笑顔と、時に厳しい態度で接してくれる。それに僕のバスケットボールチームの友だちからも慕われる、名物母さんだ。その母が僕の進路についてある日、話をしてくれた。それは「中学校で通常学級で勉強をするのか、それとも今と同じように、支援学級へ入級して勉強するのか。」ということだった。

それから僕の挑戦は始まった。それは、僕の将来のためにも通常学級で勉強をして、自分の力をしっかり付けたいと考えたからだ。

最初に取り組んだのは、国語の話し合い活動を交流学級で行うことだ。今までは先生と二人で話し合い、個人個人の意見しかなかった。しかし、学級のみんなで話し合うことは深まりがあった。僕も積極的に手を挙げ、自分の考えを述べたり聞き取った意見に対して考えをつないだりした。算数でも電子黒板に映される図形の移動や考え方を視覚的に友だちとじっくり考え、論議することができた。

昨年のお夏休み、単身赴任で京都にいた父と一緒に数々のお寺へお参りに回った。そこでいつも、「耳がよくなりますよう

に。」と願った。両親も同じ思いだったそうだ。父はぼくの進路について、「ぼくに任せる。」と話してくれた。それだけに、父がぼくを信用してくれていると感じた。父は父なりに、言葉だけではなく、態度や行動など、いろいろな経験を通して僕に伝えてくれることがある。時には剣山へ登り、自然の偉大さを肌で感じながら、将来のことを考える機会を与えてくれた。

家族の思いもあり、願いが叶いつつある。何と、病院の先生から、「聞こえがよくなっている。」という検査結果をもらったのだ。今にも跳び上がりそうな気持ちだった。このことで、僕の未来への道がより一層光り輝いた。

ぼくは将来、伯父のような機械に関する仕事に就きたいと考えている。なぜなら、僕の今使っている補聴器は汗やしょあげきに弱いので改善していきたいという思いがあるからだ。バスケットボールをしている時は外しているが、やはりコーチの話聞く際は自分から側に行ったり友だちに聞いて確認したりしている。また、僕と同じように難聴の子どもたちが補聴器を付けることが特別ではなく、日常の生活の一部として当たり前を受け入れてくれる社会にしたい。僕のこの経験が役立てられる社会になるよう「未来の僕」は走り続けたい。